

研究ノート

「エンジョイ・レスキュー (ER) サークル」が 看護学生に与える効果に関する研究

The study of the effect that a circle (Enjoy Rescue Circle) gives nursing students.

千明政好¹⁾, 片貝智恵¹⁾

Masayoshi Chigira, Chie Katakai

要旨

サークル支援の課題を知るために、エンジョイ・レスキュー (ER) サークル入会動機、サークル活動継続の理由、サークル活動して良かったことなど、ERサークル活動が学生生活にどのような影響を与えているかなどについて、面接により情報収集し、質的に分析した。サークルに入った動機は79コードで、【救命・救急医療への興味・関心】【他者の勧め・誘い】【救急の知識・技術学習】の3カテゴリー、12のサブカテゴリーに分類できた。サークル活動して良かったことを表すデータは102コードであった。102コードは、【触れ合い・かかわり増加】【蘇生法救急法の学習・指導】【救急への興味・関心】【楽しみ・喜び】の4カテゴリー、16サブカテゴリーに分類できた。「適切な学習機会」と「仲間とふれあい成長する喜び」をサークル活動の継続理由としており、特にサークル活動が適切な学習機会となるように適切な教員の支援が重要となることが示唆された。

キーワード：救命処置、サークル活動、大学生生活、影響・効果

1. はじめに

大学生の学生生活を充実させるために、クラブ活動やサークル活動などの課外活動は、多くの大学で以前から活発に行われている。

当大学でも、陸上部、駅伝部、野球部、吹奏楽部など多くの部および、ソフトテニスサークルや、やろうぜスポーツサークルなど本学のクラブ・サークルは体育系で20団体、文化・芸術系で13団体が活動している。その中で、「エンジョイ・レスキュー・サークル」(Enjoy Rescue Circle以下ERサークル)は、救急法や救急処置を学ぶことと伝えることを目的に、4年前の2007年に学生の有志数名により発足した比較的新しい文化系サークルである。当初少なかったサークルメンバーも、各学年10名程度の部員を数えるまでになった。また、継続して活動している学生も多い。

大学生のスポーツクラブ活動に関しては、スポーツ活動の継続要因に関する研究(徳永幹雄他1989)(中村忠輔他1987)や、非継続要因に関する研究(滝豊樹1988)をはじめ比較的多くの研究報告がある。また、文化系クラブの教育的・社会的効果に関する研究報告(迫俊道他2002)サークル所属に関する研究報告(渡邊義行2002)もある。しかし、看護学部の学生を対象とした、クラブ・サークル活動継続要因に関する質的な研究報告はほとんど無い。よって、本研究では、講義数も実習時間も多く学業が忙しい中でも「サークルに所属したきっかけ」「サークル活動継続の理由」「サークル活動からの学び・サークル活動が学生生活にどのような影響を与えているか」を面接により情報収集し、質的に分析することで、看護学生からなるERサークル活動継続要因を明らかにし、サークル学生への支援のありかたを明確

1) 上武大学看護学部看護学科

にすることである。

言葉の定義：

「サークル」「同じ主義趣味の者の集まり。仲間。同好会。」(広辞苑第3版：1984)をそのまま、「サークル」の意味として使用した。

エンジョイ・レスキュー・サークル (Enjoy Rescue Circle) は、上武大学独自の命名のサークル名称である。主な活動は、救急法や救急処置を学ぶことと伝えることなどを目的に活動しているサークルであり、4月の新入生への活動紹介とサークルへの勧誘活動、夏季休暇前までの2週間に1-2回のサークル活動、5月に行われる看護の日健康チェックイベントへの参加、秋の大学祭での健康チェックと救急法のブース参加などである。このほか、希望する学生は、American Heart Association (AHA) BLS Healthcare Providerの資格取得をしている。主に活動できる期間は、3年生秋の大学祭までであり、臨床実習のため3年秋以降は、1-2年生中心の活動となる。

II. 方法

1) 本研究は、グループディスカッションでデータを収集し、意味内容を質的に分析した。

2) 調査対象：上武大学看護学部1年生～4年生で研究協力が得られた、ERサークル学生。1年生5名、2年生7名、3年生4名、4年生7名の23名。

3) 調査年月：平成22年1月～2月。

4) 面接方法

①面接内容：自作のインタビューガイドを作成した。インタビューガイドの内容は、「サークルに入った動機」「サークル活動継続の理由」「サークル活動して良かったこと」の3点である。

②面接方法：授業終了後学生の都合の良い時間を選択し、大学内の会議室等の個室を使用。多くの意見が出やすいように、学年毎に集まってもらいグループ討議形式で実施した。許可を得て、ICレコーダに会話を録音した。

5) 分析方法

(1) 許可を得て録音した会話を、逐語録に記録した後、数回精読し、インタビューガイドの項目「サークルに入った動機」「サークル活動継続の理由」「サークル活動からの学び・サークル活動が学生生活にどのような影響を与えているか」の質問に対して、語られた意味内容を文節とし

てそのまま抽出し表現した文節を抽出し、有効コードとした。

(2) 有効コードを内容の類似性に従い整理した。

(3) サブカテゴリー化：サブカテゴリーは、意味内容とコードの記述を繰り返し読み、意味内容が類似しているものを集めて名称を付けた。

(4) カテゴリー化：カテゴリーは、サブカテゴリーをさらに類似性に従いまとめ、抽象化したものに名称をつけた。

(5) データ収集の信頼性・妥当性：半構成的面接方法により、データ収集を行った。面接の内容は、対象者の了承を得てすべてテープに録音し、研究者が雰囲気や非言語的なメッセージを記録できるよう、テープ起こしは即日実施した。得られたデータが、ありのままの現象として捉えられているか、バイアスが入っていないか等は複数の研究者で比較検討し、信頼性と妥当性の確保に努めた。

(6) 分析の信頼性：データに忠実に解釈が行われているかなど、データ分析の過程において、質的研究に精通した看護研究者にスーパービジョンを受けながら進めていくことで信頼性の確保に努めた。

6) 倫理的配慮

(1) 「研究に協力いただくことは、個人の自由意志によるものであり、同意できない方々に協力を強要するものではないこと。協力できないことで不利益を被ることは一切ないこと。面接時の発言は、文章化する際にデータ化するため、個人が特定されることはないこと。集められたデータは、一短文としてデータ処理し、協力していた学生に迷惑がかかることはないこと。」等を文章に明記し配布し、文章による説明と同意で、グループインタビューへの研究参加協力を確認した。

(2) 同意が得られた後も、上記の倫理的配慮を継続した。

(3) 得られたデータは、個人や施設が特定できないようにコード化し分析した。ICレコーダの生データは分析後消去し、文章化した会話録はコード化後にシュレッダーにて廃棄した。コード化した文章情報はインターネット接続から独立したコンピュータまたは媒体で管理した。

(4) 上記を含め、上武大学研究倫理審査委員会の許可を得て研究を実施した。

III. 結果

1) インタビュー対象者の概要：1年生5名、2年生7名、3年生4名、4年生7名の23名。内男子3名。サークル所属学生40名の57.5%。

インタビューは学年毎に実施し、インタビューに要した時間は平均約50分 (40~70分) であった。

2) 分析結果 (表1)

(1) 『サークルに入った動機』を表すデータは79コードであった。79コードは、【救命・救急医療への興味・関心】【他者の勧め・誘い】【救急の知識・技術学習】の3カテゴリーに分類でき、これらは、12のサブカテゴリーに分類できた。

(2) 『サークルからの学び・影響』を表すデータは102コードであった。102コードは、【触れ合い・かかわり増加】【蘇生法救急法の学習・指導】【救急への興味・関心】【楽しみ・喜び】の4カテゴリーに分類でき、これらは、16サブカテゴリーに分類できた。

(3) 『サークル活動を継続している理由』を表すデータは、90コードであった。90コードは、【知識技術の取得】【適切な活動日・内容】【触れ合い・かかわり増加】の3カテゴリーに分類でき、これらは、11サブカテゴリーに分類できた。

以下、本文中のカテゴリーは【 】で、サブカテゴリーは〈 〉で、データは「 」で示した。

(4) 『サークルに入った動機』

『サークルに入った動機』を表すデータは79コードであった。79コードは、【救命・救急医療への興味・関心】【他者の勧め・誘い】【救急の知識・技術学習】の3カテゴリーに分類でき、これらは、12のサブカテゴリーに分類できた。この3カテゴリーのコード数と割合は、【救命・救急医療への興味・関心】30コード (38.0%) 【他者の勧め・誘い】27コード (34.2%) 【救急の知識・技術学習】22コード (27.8%) であり、興味関心と、他者からの勧誘がサークル入会動機の7割を占めていた。

①【救命・救急医療への興味・関心】は、〈救急への興味〉〈看護に役立つ〉〈救急への関心〉〈他者との

表1 サークルに入った動機

代表的表現	サブカテゴリー	データ数	カテゴリー	データ数 (%)
「テレビなどで見て救命に興味を持っていた」「もともと救命に興味があった」	救急への興味	15	救命・救急医療への興味・関心	30 (38.0)
「看護に関連するような技術も身に付くのはじめようと思った」「看護に関係あるサークルに入りたかった」	看護に役立つ	7		
「医療系のサークルは面白そう」「大学に入ったら救命のサークルがあることを知った」	救急への関心	5		
「サークルに入ると先輩とか後輩と交流ができる」「仲間づくりや交流が広がるという意味でも参加した」	他者との交流・仲間づくり	3	他者の勧め・誘い	27 (34.2)
「先輩が教室にきてサークル見学募集をしてくれた」「入学後のサークル紹介で」	サークル紹介で	11		
「大学のイベントに参加した時先輩から誘われた」「先輩が誘ってくれて」	先輩に誘われて	6		
「同級生に誘われて」	同級生に誘われて	5	救急の知識・技術学習	22 (27.8)
「ポスターを作ってロッカーに貼って新入生を募集していた」	ポスターを見て	5		
「BLSをきちんと学びたかった」「看護師でもBLSできない人がいると思う、自分はBLSきちんとできるNsでいたいと思った」	BLS学習	7		
「授業とは別なプラスなことが経験できるため」「授業では学びきれないことが学べると思った」	授業以外の体験学び	6	資格取得希望	5
「BLSの資格は早く取りたい」	資格取得希望	5		
「知識はもちろん技術も身につけておかないとだめだと思った」	救急法学習	4		
		79		79 (100.0)

表2 サークルからの学び・影響

代表的表現	サブカテゴリー	データ数	カテゴリー	データ数(%)
「学年を超えているいろいろな人と話ができるようになった」「サークルに入っていたから先輩や後輩と関係が広がったのかなと思います」	学生同士の交流増加	23		
「地域の方々との交流ができたのもいい経験になった」「看護の日や学祭などイベントなどで多くの人と触れ合えて良かった」	一般の方との交流	9	触れ合い・かかわり増加	37(36.4)
「先生方との交流が深まった」「身近になんでも相談できる先生が増えた」	教員との交流増加	5		
「文化祭で参加してくれる人に教えると教えてもらって良かったって言う人が多い」「一般の人に教えるっていうことはほかの部活やサークルにはないこと」	他者への教育・指導	12		
「救急法がちゃんとできるようになりたかったので良かった」「BLSだけじゃなくていろいろな救急法とかも学べて良かった」	蘇生法学習・会得	11	蘇生法救急法の学習・指導	27(26.5)
「工夫もいっぱいする」	くり返しの練習・工夫	2		
「臨床に出て自分が使える技術もいくつか身についたと思った」	技術が身につく	2		
「サークル活動で、救急センターやドクターヘリの見学ができて良かった」「サークルに入ってから体験できたことが多い」	色々な体験	8		
「勉強してからはAED見てあっそこにあると気付くようになった」	AEDへの関心	3		
「資格だけでなく、BLS以外の救急法などにも興味があった」	救急への興味	3	救急への興味・関心	20(19.6)
「BLSだけじゃなくていろいろな救急法とかも学べて良かった」	多くの学び	3		
「授業で学ぶことがないことを学べた」「普段学べないようなことを学ばせてもらった」	授業以外のことの学び	3		
「(BLSの)資格が取れたことが一番良かったことです」「希望者は資格が取れると聞いていたので、本当に取れて良かったです」	資格取得	6		
「やるのがすごい楽しかった」「人に教える喜びも分かった」	楽しい	6	楽しみ・喜び	18(17.5)
「教習所などでBLSやったときほかの子と違うねって言われて嬉しかった」	喜び	4		
「先輩や先生からきちんと教えてもらった」	良く指導してもらえた	2		
		102		102(100.0)

交流・仲間づくり)の4サブカテゴリーに分類できた。「テレビなどで見て救命に興味を持っていた」「もともと救命に興味があった」など救急への興味と、「看護に関連するような技術も身に付くのではじめようと思った」「看護に関係あるサークルに入りたいと思った」など看護に役立つ為という理由、「医療系のサークルは面白そう」「大学に入ったら救命のサークルがあることを知った」など救急への関心、「サークルに入ると先輩とか後輩と交流ができる」「仲間づくりや交流が広がるという意味で

も参加した」など交流を理由としていた。

②【他者の勧め・誘い】は、〈サークル紹介で〉〈先輩に誘われて〉〈同級生に誘われて〉〈ポスターを見て〉の4サブカテゴリーに分類できた。「先輩が教室にきてサークル見学募集をしてくれた」「入学後のサークル紹介で」「大学のイベントに参加した時先輩から誘われた」「先輩が誘ってくれて」「同級生に誘われて」「ポスターを作ってロッカーに貼って新入生を募集していた」など、直接的・間接的な紹介や勧誘が動機となっていた。

表3 サークル継続理由

代表的表現	サブカテゴリー	データ数	カテゴリー	データ数(%)
「いろいろな技術だけでなく知識も学べる」 「サークルに入っていなければBLSも、救急技術も身に付かなかった」「先生がいて毎週教えてもらえた」	学習できる	24		
「BLSの資格を取るっていうのも目標になっていた」	資格取得	6	知識技術の取得	33(36.7)
「自分たちの興味ある内容の救急法が学べ興味を持てる」「救急に興味があったので続けようとは思っていた」	興味・関心	3		
「堅苦しすぎず和気あいあいとできたので続けられた」「気軽に誰でもいつでも出てきていいよっていうことだった」	良い雰囲気	10		
「皆の予定を聞いてサークル実施日を決めたり、参加しやすい環境だった」「週に1回放課後の1-2時間くらいなので一生懸命できる」	参加しやすい日時設定	14	適切な活動日・内容	31(34.4)
「無理なく強制的な参加じゃなかったのが良かった」	参加しやすい環境	4		
「オープンキャンパスとか看護の日とか大学祭とか、目的があったから皆で団結ができた」「大学祭や看護の日のイベントなど毎年あるので」	内容がよい	3		
「皆と目標が共有できたこと」「自分が教える立場での体験もたくさんできたので学ぶ目標作りにつながった」	目的の共有	8		
「後輩や一般の方々に教えたりして自分の中で成果が見えるように思えた」「皆で準備して来てくれた人に教えるというのは、サークルでしか経験できないことだから」	サークル以外の人とのかかわりがある	7	触れ合い・かかわり増加	26(28.9)
「サークルで外への活動もやるようになって楽しいなって感じたので」「きちんと指導してもらえるので楽しく参加できた」「楽しかったというのが一番」	楽しみがある	6		
「ほかの学年と、サークルに入る前は挨拶もなかったけれどいまは挨拶する」「人と接することが楽しかった」	かかわり増加	5		
		90		90(100.0)

③【救急の知識・技術学習】は、〈BLS学習〉〈授業以外の体験学び〉〈資格取得希望〉〈救急法学習〉の4サブカテゴリーに分類できた。「BLSをきちんと学びたかった」「看護師でもBLSできない人があると思う、自分はBLSきちんとできるNsでいたいと思った」「授業とは別なプラスなことが経験できるため」「授業では学びきれないことが学べると思った」「BLSの資格は早く取りたい」「知識はもちろん技術も身につけておかないとだめだと思った」など、救急法の知識や技術の習得および、BLS資格取得を動機と語っていた。資格取得とは、American Heart Association (AHA) BLS Healthcare Providerの資格取得であり、この資格が取得できることを動機に上げていた学生が多い。

(5)『サークルからの学び・影響』

『サークルからの学び・影響』を表すデータは102コードであった。102コードは、【触れ合い・かかわり増加】【蘇生法救急法の学習・指導】【救急への興味・関心】【楽しみ・喜び】の4カテゴリーに分類でき、これらは、16サブカテゴリーに分類できた。この4カテゴリーのコード数と割合は、【触れ合い・かかわり増加】37コード(36.4%)【蘇生法救急法の学習・指導】27コード(26.5%)【救急への興味・関心】20コード(19.6%)【楽しみ・喜び】18コード(17.5%)であり、触れ合い・かかわり増加が一番多かった。

④【触れ合い・かかわり増加】は、〈学生同士の交流増加〉〈一般の方との交流〉〈教員との交流増加〉の3サブカテゴリーに分類できた。「学年を超えて

いろいろな人と話ができるようになった」「サークルに入っていたから先輩や後輩と関係が広がったのかなと思います」「地域の方々と交流ができたのもいい経験になった」「看護の日や学祭などイベントなどで多くの人と触れ合えて良かった」「先生方との交流が深まった」「身近になんでも相談できる先生が増えた」など、学生同士のみならず、一般の方々や教員との交流が深まったことをよい体験と認識していた。

- ②【蘇生法救急法の学習・指導】は、〈他者への教育・指導〉〈蘇生法学習・会得〉〈くり返しの練習・工夫〉〈技術が身につく〉の4サブカテゴリーに分類できた。「文化祭で参加してくれる人に教えると教えてもらって良かったって言うってくれる人が多い」「一般の人に教えるっていうことはほかの部活やサークルにはないこと」「救急法がちゃんとできるようになりたかったので良かった」「BLSだけじゃなくていろいろな救急法とかも学べて良かった」「工夫もいっぱいする」「臨床に出て自分が使える技術もいくつか身についたと思った」など、自らの救急法の技術取得だけでなく、人に指導できるレベルで学べることを活動してよかった理由としていた。
- ③【救急への興味・関心】は、〈色々な体験〉〈AEDへの関心〉〈救急への興味〉〈多くの学び〉〈授業以外のことの学び〉の5サブカテゴリーに分類できた。「サークル活動で、救急センターやドクターヘリの見学ができて良かった」「サークルに入って活動していたから体験できたことが多い」「勉強してからはAED見てあっそこにあると気付くようになった」「資格だけでなく、BLS以外の救急法などにも興味があった」など、救急関連への興味や関心を、サークル継続してよかったこととして語っていた。
- ④【楽しみ・喜び】は、〈資格取得〉〈楽しい〉〈喜び〉〈良く指導してもらえた〉の4サブカテゴリーに分類できた。「(BLSの) 資格が取れたことが一番良かったことです」「希望者は資格が取れると聞いていたので、本当に取れて良かったです」「やるのがすごい楽しかった」「人に教える喜びも分かった」「教習所などでBLSやったときほかの子と違うねって言われて嬉しかった」「先輩や先生からきちんと教えてもらえた」など、多くの喜びや楽しみを体験しており、それを語っていた。

(6) 『サークル活動を継続している理由』

『サークル活動を継続している理由』を表すデータは、90コードであった。90コードは、【知識技術の取得】【適切な活動日・内容】【触れ合い・かかわり増加】の3カテゴリーに分類でき、これらは、11サブカテゴリーに分類できた。3カテゴリーのコードと割合は、【知識技術の取得】33コード (36.7%) 【適切な活動日・内容】31コード (34.4%) 【触れ合い・かかわり増加】26コード (28.9%) であり、知識技術の取得と適切な活動日・内容が、サークル活動を継続している理由では多かった。

- ①【知識技術の取得】は、〈学習できる〉〈資格取得〉〈興味・関心〉の3サブカテゴリーに分類できた。「いろいろな技術だけでなく知識も学べる」「サークルに入っていなければBLSも、救急技術も身に付かなかった」「先生がいて毎週教えてもらえた」「BLSの資格を取るっていうのも目標になっていた」「自分たちの興味ある内容の救急法が学べ興味を持てる」「救急に興味があったので続けようとは思っていた」など、救急法含めいろいろな学習ができることや資格取得できることを継続理由であると語っていた。
- ②【適切な活動日・内容】は、〈良い雰囲気〉〈参加しやすい日時設定〉〈参加しやすい環境〉〈内容がよい〉の4サブカテゴリーに分類できた。「堅苦しすぎず和気あいあいとできたので続けられた」「気軽に誰でもいつでも出てきていいよっていうことだった」「皆の予定を聞いてサークル実施日を決めたり、参加しやすい環境だった」「週に1回放課後の1-2時間くらいなので一生懸命できる」「無理なく強制的な参加じゃなかったのが良かった」「オープンキャンパスとか看護の日とか大学祭とか、目的があったから皆で団結ができた」「大学祭や看護の日のイベントなど毎年あるので」など、参加しやすい環境を話し合いで作り、気軽に参加しやすいことを、サークル継続理由に挙げていた。
- ③【触れ合い・かかわり増加】は、〈目的の共有〉〈サークル以外の人とのかかわりがある〉〈楽しみがある〉〈かかわり増加〉の4サブカテゴリーに分類できた。「皆と目標が共有できたこと」「自分が教える立場での体験もたくさんできたので学ぶ目標作りにつながった」「後輩や一般の方々に教えたりして自分の中で成果が見えるように思えた」「皆で準備して来てくれた人に教えるというのは、サーク

ルでしか経験できないことだから」「サークルで外への活動もやるようになって楽しいなって感じたので」「きちんと指導してもらえるので楽しく参加できた」「楽しかったというのが一番」「ほかの学年と、サークルに入る前は挨拶もなかったけれどいまは挨拶する」「人と接することが楽しかった」など、多くの方々との触れ合いやサークル参加の楽しさなどを、サークル継続理由に挙げていた。

IV. 考察

1) サークルに入った動機

『サークルに入った動機』を表すデータは79コードであった。79コードは、【救命・救急医療への興味・関心】【他者の勧め・誘い】【救急の知識・技術学習】の3カテゴリーに分類でき、これらは、12のサブカテゴリーに分類できた。

当大学看護学部の実員は240名在籍数263名(平成22年3月31日)、ERサークルだけで40名(15.2%)の学生が活動している。徐々に増加しているが、その理由が、BLS資格の取得、救命・救急医療、救急処置への興味・学習、授業以外の学び・経験、他者からの勧め・誘いや他者との交流・仲間づくり、と回答しており、授業内容や将来看護師に必要な知識技術に関連することを深められることやサークルでの仲間作りなどのコミュニケーション充実を求めて入会していることがわかる。非常に前向きな行動であり、入会後の活動継続にもつながる、しっかりした動機を持って入会していると判断できる。

看護学生の部活動やサークル活動参加について、「看護学生のゆとりについて看護専門学校4校の在籍生を対象にアンケート調査を実施し、看護学生の平均自由時間は7.9時間で73.6%の学生が満足しておらず、自由時間には、友人との語り、生活に必要な行為、学校の授業に関すること、などが多く、自己同一性の達成を助けるといわれている、サークル、ボランティア、アルバイトを行っている学生は約1~2割と少ないことが分かった。」(星野他、2005)との報告があるが、少ない自由時間の中に、部活動やサークル活動を行うことを選択するよう、魅力あるサークル活動となるように支援することも、私達教員は意識し指導や協力をすることも、サークル活動への参加者を増加させるために重要である。私達は、ERサークル学生達の自主活動が主体ではあるが、活動日にはBLSの知識やスキル、救急法をはじめ

とした技術指導、American Heart Association (AHA) BLS Healthcare Providerの資格取得希望学生指導など、学生の求めに応じサークルに参加し積極的に関わり支援している。「先生にもきちんと指導してもらえるようになったのでやりたいことが身につくようになった」などと学生が述べているが、このような学生のニーズに応じる、教員の積極的なサークル活動支援も重要であることがわかる。

2) サークルからの学び・影響

『サークルからの学び・影響』を表すデータは102コードであった。102コードは、【触れ合い・かかわり増加】【蘇生法救急法の学習・指導】【救急への興味・関心】【楽しみ・喜び】の4カテゴリーに分類でき、これらは、16サブカテゴリーに分類できた。

「大学生のクラブ・サークル活動学生は、スポーツ系非スポーツ系加入者の8割以上が共に活動の意義があると回答している」(迫・荒井、2002)、どのようなサークルに所属していようと、関わり方によって意義が高いことを示していると言え、当大学のERサークルの学生が、サークル活動して良かったこととして、「AED救急への興味」「授業以外の学習・経験」「蘇生・救急法の知識・経験」「他者への教育・指導経験」「楽しみ・喜び」「触れ合い・かかわり増加」など、多くの理由をあげているが、どれも、学生自身が自ら参加し所属し活動した結果もたらされた効果といえ、時間調節や分担される役割を果たしつつも、活動したからこそ得られた多くの良い経験を持っていった。

社会でも公民館などでサークル活動が行われているが、「人と人とのつながりが希薄になっているが、入会し、活動を通じて、やらされるのではなく自発的に行動するさわやかさや、大変だけれどやりがいある充実感を得て、少しずつ変化していく」(田中、2000)と報告されているように、大学でのサークル活動も、入会し活動することで、やりがいや充実感が得られることに共通点が見える。

3) サークル活動を継続している理由

『サークル活動を継続している理由』を表すデータは、90コードであった。90コードは、【知識技術の取得】【適切な活動日・内容】【触れ合い・かかわり増加】の3カテゴリーに分類でき、これらは、11サブカテゴリーに分類できた。

「サークル所属の理由について、教育学部生へのアンケート調査では、その活動がすき：男子94.2%、女子90.4%、もっとその技量を高めたい：男子91.4%、女子64.4%、自分を鍛えたい：男子71.4、女子43.8%、充実した学生生活を過ごしたい：男子68.5%、女子86.3%であった」(渡邊・高橋、2002)と、自分自身を高めることや、充実した時間を過ごすことを所属理由としており、今回の対象者の「知識技術の取得」「学び成長する楽しみ」「仲間とふれあい成長する喜び」と類似していた。

また、「クラブ・サークル活動への参加動機は、学部生及び大学院生とも活動内容に関する興味や友人を得るための機会と捉えている学生が多く、純粋な動機でクラブ・サークル活動に参加していることが分かる。一方、クラブ・サークルに参加しない理由の一番には、興味がない、自分に適したクラブ・サークルがないなどの理由を挙げる学生も多く、勉学に支障がある」と考える学生はそれほど多くない。クラブ・サークル活動の週平均活動時間は、学部学生で2時間未満が19.7%、2-5時間が32.4%であり、残りの47.9%の学生が5時間を越える活動をしている」(山田、2003)と報告がある。ERサークルの週2時間程度の活動時間は、学生が「週に1回放課後の1-2時間くらいなので一生懸命できる」「辞めたいと思ったときがあったけど週1なので続けられた」と述べているように、それほど学業への負担は少なく、スケジュール調整しやすいなど、負担感が少ないとも言え、サークル活動継続の要因になっている。

また、大学生のクラブ・サークル活動学生と非活動者の教育的・社会的効果として、活動学生は非活動学生に比べ大学生活に対する自分自身の満足とする評価が高く、不満という評価が低いと報告している(迫・荒井、2002)。継続して関わることで、多くの学びや経験、人との関わりの拡大など、授業以外での自分自身の成長を実感した結果である。

各大学のHPでは必ずと言ってよいほど、部活動サークル活動の意義が明記されている。

「課外活動を通じてエネルギーの醸成と人格の形成を！」(岡山大学HP)。「課外活動は、学生が自主的に行う活動であり、社会の一員として必要な資質を身につけたり、教養を高めるなどの大切な役割を担っています。また、本学のサークルは、多くの競技会で優秀な成績を残しています。課外活動によって得られるさまざまな経験は学生生活を充実させ、

一生忘れることのできない素晴らしい思い出にもなります。本学としては、学生が各自の関心と適性にあったサークルに所属し、より高い専門知識や技能を身につけるためにも積極的に活動することを勧めています。(鹿屋体育大学HP)。「課外活動は、学生が正課外において自主的に行う文化・体育などの諸活動であり、これらの活動を通じ、豊かな情操と健全な心身の育成が図れるものとして、人間形成上の効果が期待されております。本学には、文化系及び体育系の各種の課外活動団体があり、それぞれ活発な活動を行っているので、各自に適合した課外活動団体に積極的に加入し、友人や教職員との接触を深め、円満な人格の養成に努められるよう希望いたします。(群馬大学HP)」など、学生の自主的な活動であること、エネルギーの醸成と人格の形成やより高い専門知識や技能を身につける、円満な人格の養成などを図るよう支援されていることがわかる。文化系サークルである、当大学ERサークルの学生は、「適切な学習機会」と「仲間とふれあい成長する喜び」をサークル活動の継続理由としており、特にサークル活動が適切な学習機会となるように適切な教員の支援が重要となる。

V. まとめ

- 1) エンジョイ・レスキュー (ER) サークル入会動機、サークル活動継続の理由、サークルからの学び・影響など、ERサークル活動が学生生活にどのような影響を与えているかなどについて、グループインタビューにより情報収集し、質的に分析した。
- 2) 「サークルに入った動機」を表すデータは79コードであった。79コードは、【救命・救急医療への興味・関心】【他者の勧め・誘い】【救急の知識・技術学習】の3カテゴリーに分類でき、これらは、12のサブカテゴリーに分類できた。
- 3) 「サークルからの学び・影響」を表すデータは102コードであった。102コードは、【触れ合い・かわり増加】【蘇生法救急法の学習・指導】【救急への興味・関心】【楽しみ・喜び】の4カテゴリーに分類でき、これらは、16サブカテゴリーに分類できた。
- 4) 「サークル活動を継続している理由」を表すデータは、90コードであった。90コードは、【知識技術の取得】【適切な活動日・内容】【触れ合い・か

かわり増加】の3カテゴリーに分類でき、これらは、11サブカテゴリーに分類できた。

VI. 終わりに

この研究対象は、1看護学部のみであり、看護学部の学生にとってサークルに所属することによる、効果や影響与えているか普遍化するには限界がある。事例を増やすなど今後もサークルが学生に及ぼす影響や効果について検討して行きたい。面接調査に快く協力して頂いた、ERサークル23名の学生諸氏に感謝いたします。

引用文献

- 星野牧子・高橋方子 (2005) 看護学生の『ゆとり』に対する意識について、第36回日本看護学会論文集—看護教育—, 194-196.
- 滝豊樹 (1988) : 大学進学時における運動部非継続の要因、第一経大論文集18 (1), 169-178.
- 田中理恵子 (2000) : 特集：現代のサークル力, 公民館サークル活動と公民館—福岡市主婦卓球愛好会の活動を通して—, 月刊社会教育44 (6), 13-20.
- 徳永幹雄 (1989) : スポーツ行動の継続化とその要因に関する研究 (2) —大学生の場合—, 健康科学11, 87-98.
- 迫俊道・荒井貞光 (2002) : 大学生のクラブ・サークル活動に関する研究、広島体育学研究28, 11-20.
- 新村出編 (1984) : 広辞苑第3版, 924, 岩波書店, 東京.
- 渡邊義行・高橋雄一 (2002) : 岐阜大学教育学部生のサークル所属に関する調査研究、岐阜大学教育学部研究

報告 (自然科学) 26 (2), 23-31.

山田剛史 (2003) : 大学生における自己形成に関する研究 (1) —全体性から抽出された活動内容と認知的評価およびその文脈からの検討—, 日本発達心理学会第14回大会発表論文集, 46.

鹿屋体育大学HP : http://www.nifs-k.ac.jp/campus_life/activities/

群馬大学HP : http://www.gunma-u.ac.jp/html_campus/campuslife_18.html

岡山大学HP : http://www.okayama-u.ac.jp/tp/life/sei-katu_b7.html

参考文献

- 湯口唯男 (1989) : サークル活動の現状と課題, 大学と学生, 288, 25-28.
- 佐々木輝美 (1993) : 学生が文化系サークル活動から得ている満足について, 大学と学生, 335, 21-26.
- 青柳雄介 (2007) : クラブ・サークル活動が就職力を鍛える, サンデー毎日, 79-81, 2007. 6. 10.
- 恵下妙子、元山諭美、石部洋一 (2008) : QCサークル活動導入による問題解決力に及ぼす影響, 全国自治体病院協議会雑誌, (0389-1070) 47 (4), 651-654.
- 久保恭子、及川裕子、刀根洋子 (2006) : 乳幼児の母親が育児サークルに求めているもの, 共立女子, 短期大学看護学科紀要, 1, 97-101.
- 淘江七海子、堀美紀子、松村千鶴 (2003) : 看護学生のコミュニケーション能力に関する研究 入学時と6ヵ月後を比較して, 香川県立医療短期大学紀要4, 15-22.